

ねりまの文化財

文化財を火災から守ろう！

1月26日は文化財防火デー

例年1月26日は「文化財防火デー」です。毎年この日を中心として文化財を火災などの災害から守るため、全国各地で防火訓練が行われます。

戦後の混乱の中で、経済的基盤を失った文化財の所有者がそれらを売却、あるいは放置するという事態が各地でおこりました。

昭和24年1月26日、現存する世界最古の木造建築物である法隆寺(奈良県生駒郡斑鳩町)の金堂が炎上し、白鳳時代(7世紀半ば〜8世紀初め)の壁画が焼損しました。翌年には、金閣寺(京都市北区)が、放火により焼失するなど、貴重な文化財の焼損が相次ぎました。

これらの事件を契機に、火災など災害による文化財保護の危機を深く憂慮する世論が高まり、文化財保護法が制定されました。1月と2月が1年のうちで最も火災が多く発生しやすい時期であることから、法隆寺金堂の修理事業が竣工した翌年の昭和30年に1月26日を「文化財防火デー」と決めました。

練馬区でも、火災に備え、練馬、光が丘、石神井の各消防署や地域の防災組織による防火訓練を各管内の寺社等で行います。

どなたでも自由に見学できますので、ぜひお越しください。

※日時・場所

○1月25日(火)午前9時30分から

・長命寺(高野台3-10)

光が丘消防署

・氷川神社(氷川台4-47)

練馬消防署

練馬区
教育委員会事務局
生涯学習課
(文化財係)
〒176-8501
練馬区豊玉北6-12-1
TEL 03(5984)2442

○1月25日(火)午前10時から

・妙福寺(南大泉5-6)

石神井消防署

・愛染院(春日町4-17)

練馬消防署

○1月26日(水)午前10時から

・南蔵院(中村1-15)

練馬消防署

【問合せ】 文化財係



本立寺(関町北)放水の様子

ねりまの縄文展

2月2日(水)〜21日(月)

区役所本庁舎アトリウム

正面向口西側

区内には120箇所の遺跡が確認されています。そのうち90箇所あまりが縄文時代の遺跡です。縄文時代はおよそ一万三千年前に始まり、一万年の間続きました。

今回は、区内の縄文時代の遺跡から出土した土器や石器を展示します。出土品とあわせて、土器の出土状態など発掘調査の様子や縄文人が住んでいた竪穴住居跡の写真パネル等も展示します。また期間中に、左記のとおり郷土資料調査員が解説を行います。

【展示解説】

①2月2日(水)午後3時〜3時半

②2月21日(月)午前11時〜11時半



縄文土器

八ヶ谷戸遺跡(大泉町二丁目)

ねりまの庚申塔

60日に一度巡ってくる庚申の日の

夜には、人が眠ると体内から三尸の虫が抜け出て、天帝にその人の罪を報告に行き寿命を縮めるといふ教えがありました。これを防ぐと人々は、その日は一晩中眠らずに過ごしました。この庚申待の習俗・行事が全国各地で見られます。練馬区内でも各所で村人が庚申講を結び、庚申の日の晩に一堂に会し、飲食して夜を明かしました。

庚申塔とは、この長年にわたる庚申信仰を記念して各地に造立された石塔・石碑などです。現在、区内にも130基余りの庚申塔が残っています。

◆いつごろ造立されたの？

区内に残る最古の庚申塔は、長享2年(一四八八)銘のある板碑で、庚申待板碑とも呼ばれています(左写真、区指定文化財)。昭和30年に春日町で発見され、現在は石神井公園ふるさと文化館で展示しています。中央上部に文殊菩薩を意味する梵字「マン」、その下に「奉申待供養結衆」として僧侶と



12名の俗人の名前が刻まれています。戦国時代の初め頃、この地域で人々が結衆し、申待(庚申待)を行っていたことがわかります。

その後、区内に残る庚申塔は、170年余りを経た江戸時代の寛文3年(一六六三)のもので、その間に庚申待の習俗がどの程度の広がりをみせたのかはわかりません。

区内の庚申塔のほとんどは、江戸時代に造立されたものです。年代別にみると、17世紀後半のものが36基、18世紀前半が47基、同後半が23基、19世紀前半が9基、同後半が6基、20世紀後半が18世紀前半に比較的集中して造立されました。なかでも、元禄・宝永年間(一六八八〜一七一)の約20年の間に造立された庚申塔は39基残されており、当時庚申塔の造立ブームがあったと考えられます。

◆どこに立っているの？

区内の庚申塔の現所在地は、寺社の境内や路傍がほとんどですが、寺社にある庚申塔には、本来所在した路傍から移転したものも多くみられます。

庚申塔は、旧上練馬・下練馬両村をはじめとして、区の東部に比較的多く

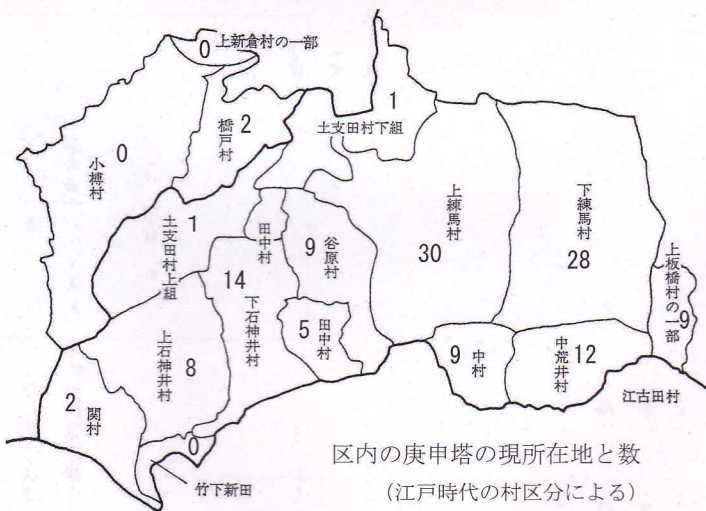
所在します(左の図参照)。

これは江戸時代の主な旧道が交錯する地域であったことと関係したと思われる、実際に下練馬道・ふじ大道・埼玉道・新井薬師道などの旧道沿いや辻などで見ることが出来ます。

18世紀に入ると、「右かわこへみち(川越道)六里余」「左たなしみち(田無道)三里」のように方角や行き先、距離などを刻んだ道標(道しるべ)



三猿像(下石神井6-1 天祖神社の庚申塔)



を兼ねる庚申塔があらわれます。区内には享保4年(一七一四)銘のもの(現莊嚴寺、元は早宮1-44)を初見として20基残されており、旧道沿いに立てられた理由がうかがえます。



錦2-23 ふじ大道沿い (向かって右側面に「右ふじ大道」と刻む)

◆どのような形をしているの？

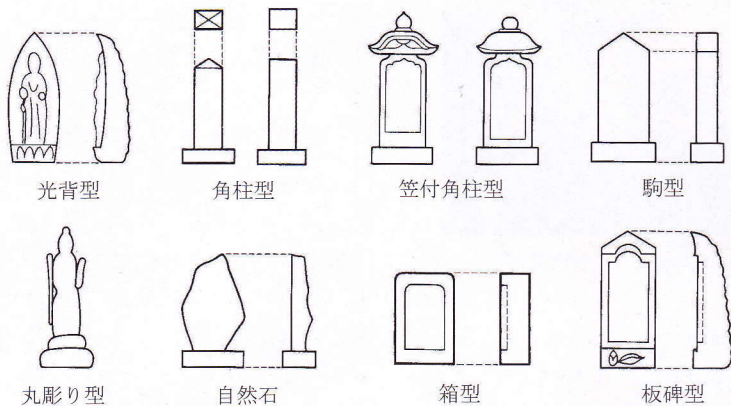
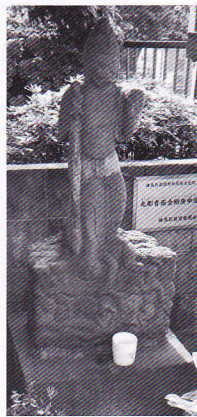
庚申塔は、様々な形態をしています(次頁上図参照)、区内で最も多くみられるのは駒型と笠付角柱型です。

駒型は、将棋の駒のように上部が山形です。寛文9年(一六六九)銘のものを初めとして54基確認され、江戸時代から明治・大正期まで、時期を問わず一般的に造立された形態です。

笠付角柱型は、角柱の上部に笠(屋根)をのせます。寛文5年(一六六五)銘から寛政12年(一八〇〇)銘のものまで44基確認でき、江戸時代に多く造立されました。なかには笠の上に宝珠などをのせるものもあります。

この他には、角柱型が12基、仏像の背後に光背を造る光背型が8基、板碑型が6基、上部の角に丸みをつけた箱型が2基、自然石を用いたものが3基

あります。また青面金剛立像を丸彫りした珍しい丸彫り型の庚申塔が1基みられます(下石神井5-7、区登録文化財、左写真)。



◆彫刻されているのは何?

庚申塔には、主尊(祀るべき神仏)が刻まれますが、区内のほとんどは青面金剛で90基確認できます。このうち



春日町3-2 寿福寺



春日町4-16 (元は春日町3-33)

青面金剛の立像を浮き彫りした庚申塔が87基、「青面金剛尊」など文字のみ刻むものは3基です。彫像の多くは邪鬼を踏み形をとり、他には上部に日月、下部に三猿(見ざる・聞かざる・言わざる)や二羽の鶏などが彫られます。三猿像は青面金剛がなくとも彫られ98基の庚申塔で確認できます。この他には地藏菩薩を主尊とするものが3基、「庚申」「庚申塔」などの文字を大書するものが16基あります。

◆だれが造立したの?

造立者のわかる庚申塔は123基あります。このうち講の名や人数を刻むものが43基、複数の人名を連ねて刻むものが37基みられます。17世紀末以後、講を代表して施主(願主)一人の名を



向山1-3

刻むものが登場し43基確認できます。

造立者のほとんどは男性ですが、女性の名がみえる庚申塔も7基あります。寛文7年(一六六七)銘の庚申塔(中村3-11)には、僧侶の名以外は女性7人の名が刻まれており、女性だけの講の存在がうかがえます。

◆区の指定・登録文化財はあるの?

区の指定・登録文化財となっている庚申塔は6基あります。指定・登録の名称と所在は次のとおりです。

《指定有形民俗文化財》
「長享二年の申待板碑」
(石神井公園ふるさと文化館)

《登録有形民俗文化財》
「高松の庚申塔」(高松2-3)

「丸彫青面金剛庚申塔」
(下石神井5-7)

「林稲荷神社の庚申塔」
(豊玉北1-7林稲荷神社)

「高松の板碑型庚申塔」(高松1-22)

「谷原の庚申塔」(富士見台4-36)

詳細については練馬区のホームページでもご覧になれます。

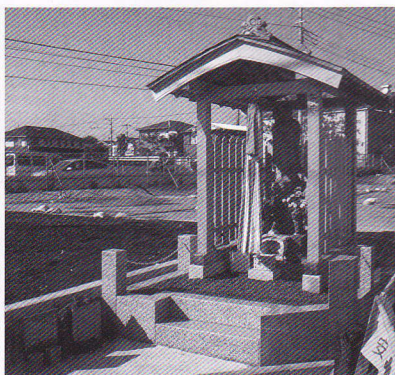
今年(2011)の庚申の日(1月5日、3月6日、5月5日、7月4日、9月2日、11月1日、12月31日)です!

土支田地蔵

引越しました

昨年10月、「土支田地蔵」の名で親しまれている土支田3-38の地藏菩薩立像が、区画整理のため、土支田地蔵前の交差点の角から数十メートル北(土支田2-36)へ移転しました。そして、世話人8名によって新築されたお堂に安置されました。

地藏菩薩立像は、石造で総高175cm、像の高さ80cmです。慶応元年(一八六五)頃に造立されたと伝えられ、長い間、旧道「長久保道」の辻に立っていました。移転した今も花が供えられ、地元の方々に大切にされています。



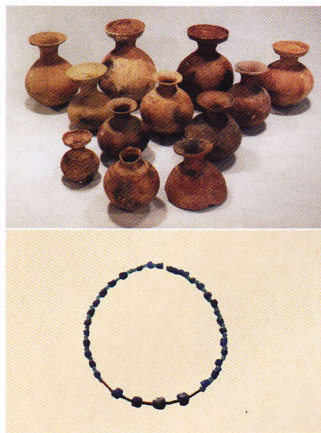
新築されたお堂



移転した地藏菩薩立像

◆発掘調査からわかる私たちの歴史◆

区内では120箇所の遺跡が見つかっています。個人住宅や集合住宅の建設、道路拡幅工事等の場所が遺跡に該当している場合には、文化財保護法第93条（公共事業の場合は第94条）による発掘が義務づけられており、遺跡保護の方法や内容は、工事計画によって変わってきます。遺跡が消滅する恐れがある場合、事前に試掘調査を実施し、遺跡が発見された場合は、本調査を実施します。



丸山東遺跡 方形周溝墓

丸山東遺跡 方形周溝墓出土の弥生土器(上)・首飾り(下)



石神井城跡(1998年発掘調査 土壘頂部から堀を望む)

調査により、遺跡が新たに発見される場合もあります。東京外かく環状道路の建設に先立ち、大泉二丁目・三丁目にて試掘調査を行ったところ、新たな遺跡「丸山東遺跡」が発見され、弥生時代の方形周溝墓が何基も出土しました。主体部から鉄剣や首飾り、溝からほぼ完形の弥生土器の壺が出土しました。方形周溝墓は首長の墓といわれており、出土した土器は、底が打ち欠かれ、葬送儀礼に使われたと考えられます。外かん道路関連遺跡(No.10)の丸山東遺跡の方形周溝墓一括遺物は、平成16年に東京都の文化財に指定されました。

さらに、白子川の低地部から弥生古墳時代の木製品が出土しました。静



尾崎遺跡 縄文時代早期 尖底土器

岡県の登呂遺跡でみられるような段梯子などの建築部材や鋤や鍬などの農耕具等が見つかりました。

ほとんどの遺跡は記録保存を行い、調査後には開発工事により消滅してしまいますが、遺跡が確認された後に公園などとして埋め戻し保存されている遺跡もあります。

公園として残しているのは、石神井町五丁目の池淵遺跡(No.64)、石神井台一丁目の石神井城跡(No.53)、早宮一丁目の早宮史跡公園内の東早淵遺跡(No.143)です。このうち東早淵遺跡では、旧石器時代く平安時代の住居跡などの遺構が見つかりました。旧石器時代の局部磨製石斧は、関東ロームIV層から出土した、区内で最も古い時期、約三万年前の石器です。

石神井城跡は、都立石神井公園内にある中世の領主豊島氏の城館で、15世紀に太田道灌に攻められた城ですが、主郭の部分はよく残っています。

残された遺跡には限りがあります。また遺跡には個性があり、それぞれ異なる時代かを知ることができる貴重な情報源です。遺跡を保存することが最も大切ですが、やむをえず開発で消滅してしまう場合は、事前の発掘調査を行い、必要な情報を記録し保存していく責務があります。また、遺跡の保存だけでなく、活用していくことも重要です。発掘調査の成果は、私たちの住む地域や祖先の歴史を知る重要な役割を担っています。



東早淵遺跡 旧石器時代 局部磨製石斧